

障害のある子どものきょうだいの インフォーマルサポートに関する調査研究

阿部 美穂子・神名 昌子*

Research on informal support for siblings of children with disabilities

Mihoko ABE & Masako KANNA

摘要

本研究では、質問紙調査と面接調査により、障害のある子どものきょうだいのインフォーマルサポートについて調べ、きょうだいのインフォーマルサポートに対する期待感に影響を及ぼす要因や、保護者が認識しているインフォーマルサポートの実際とのギャップを検討した。また、インフォーマルサポートの期待感が高い群と低い群におけるサポート内容の違いや差をもたらしている要因を検討した。その結果、質問紙調査から保護者の認識するインフォーマルサポートの多さときょうだいの期待感の高さは関連しているものの、保護者の認識しているインフォーマルサポートの実際値は、きょうだいのIS期待値よりも有意に高く、きょうだいは保護者が行ったつもりレベルほどにはインフォーマルサポートを受け取れると期待していないことが分かった。また面接調査から、インフォーマルサポートの期待感が高い群の保護者と低い群の保護者は、きょうだいに対する配慮の種類や内容に質的な差があり、特に低い群では、きょうだいのサポート源が少なく父親のかかわりが不十分であることが分かった。以上のことから、きょうだいの子育て支援にあたっては、きょうだい家族等からのサポートを実感できるようなかかわりを促進するために、家族全体を視野に入れ支援を行う重要性が示唆された。

キーワード：障害児のきょうだい 親子関係 子どものためのインフォーマルサポート

keywords：Siblings of children with disabilities, Parent-child relationships, Informal support for children

I はじめに

障害のある子ども（以下、同胞）と共に育つ兄弟姉妹（以下、きょうだい）の抱える問題については、立山ら（2003）が、複数のきょうだいに共通した成長過程上の気になる兆候として、円形脱毛・喘息・夜尿・一時的な不登校・不公平感の訴え・すぐ泣く・甘える等を挙げ、母親が同胞の育児に手をとられている現状や、同胞がいることによる家庭内の緊張の高まりが原因で、母親に対して自分の存在をアピールするためのサインが含まれていると考えられることを示している。また、吉川（2001）は、きょうだいたちの中には、機能不全の家庭の状況の中で育つ可能性があり、その場合には、自己評価や自尊感情の低下、親からの過剰な期待と現実の自分とのギャップに対する悩み、子どもらしく生きていくことの困難さ、固定された家族役割の中での自立への欲求の出しにくさなどを抱えることとなると指摘し、「障

害児のきょうだいたちは、自分の全てを受け入れてもらったという経験（主観的経験）が不足して育つことが多い」と述べている。これらの問題は、いずれもきょうだいが保護者から十分なかかわりや支援を得られていないと感じているために起こってくる問題であると言える。

一方、このような問題について、きょうだいを育てている親はどのように感じているのであろうか。筆者らは、T県内の特別支援学校に在籍する児童生徒の保護者に協力を得て、小学生以上のきょうだいのいる346家庭について、質問紙を用いて保護者のきょうだいに対する悩み事・困り事の実態と、きょうだいに心配なことがあるときの対処方法について調査した（阿部・神名，2011）。その結果、きょうだいに対して悩み事・困り事が「ある」と回答した保護者は71%（245名）を占め、きょうだいの子育てでは多くの保護者にとって課題となっていることが明らかになった。また、悩み事・困り事の内訳として、特に心情面で「不公平感」が最も多く、続いて「いつまでも親といたがる」「よく泣く」が挙げられ、

*富山県立高志支援学校教諭

少数の記述にも、「きょうだいがいつも後回しになる」「コミュニケーションがとれない」というものがあり、保護者自身が自らのきょうだいに対するかわりに不適切さや、不十分さがあると感じ、親子関係と関連付けてきょうだいの育ちにおける悩み事や困り事をとらえていることが示唆された。西村ら(1996)、立山ら(2003)も、きょうだいを育てる母親の問題として、子どもを平等に育てたいと思いつながりながらできない、または平等に扱うようにと配慮していてもどうしても同胞の方に注意が向いてしまうと感じていることを指摘している。また、富安・松尾(2001)が脳性まひ児者をもつ母親に対して、きょうだいの子育てにおける心配事や不安等について実施した質問紙調査でも、母親は、きょうだいに対して我慢させている、相談にのってやれないなどの問題を抱えていることが報告されている。

このように保護者は自らのきょうだいへのかかわりやコミュニケーションが不十分であることを自覚しており、筆者らの調査(阿部・神名, 2011)では、保護者がきょうだいに心配なことがあるときの対処方法として、「きょうだいと話し、気持ちを分かってやる」「きょうだいと二人だけの時間を持つ」「きょうだいを優先する」「平等に接する」ことを心がけて、きょうだい本人に向き合うため努力していることが分かった。

このような保護者からのきょうだいへの対応は、きょうだいにとっては、いわゆるインフォーマルサポートととらえることができる。三木(1998)によれば、インフォーマルサポートとは、家族や友人、知人からの有形・無形のサポートのことであり、公共機関等からのサポートであるフォーマルサポートと併せて、ソーシャルサポートの一つであるとされる。インフォーマルサポートは、子どもの育ちを支える重要な要因の一つであるといえる。それを受ける子どもの側からすると、家族をはじめとした周囲から支えられている実感であり、保護者の視点に立つと日々の子育てにおいて実践している配慮そのものを表していると考えられる。

それでは、実際にきょうだいはこのインフォーマルサポートをどのようにとらえているのであろうか。親が同胞の世話に手を取られ、過剰な期待により、親からの全面的受容体験が不足する可能性が指摘される環境において、きょうだいたちは、どのように自分がサポートされると認識しているのであろうか。

また、どのような条件がきょうだいのインフォーマルサポートに対する認識に影響を及ぼすのであろうか。一方、保護者自身はきょうだいを得ているインフォーマルサポートをどのように認識しているのであろうか。これまでの研究は、きょうだいの抱える心理的な問題や育ちにおける課題を明らかにする目的で、その原因としてのきょうだいに対するインフォーマルサポートの状況を考察しているものがほとんどであり、実際にきょうだいが自分を支えてくれるはずのインフォーマルサポートをどのように認識しているかについては、十分明らかにされていない。きょうだいが認識するインフォーマルサポートの実際は、家族との関係をきょうだいがどのように評価しているか、また、保護者のきょうだいに対する子育て上の配慮がきょうだい自身にとって実感できているかを示す指標となるものであり、その子育ての在り方を考えるために必要な情報であると考えられる。そこで本研究では、きょうだいときょうだいを育てる保護者にまず質問紙調査を実施し、きょうだいは、自らに対するインフォーマルサポートについてどのような期待感を持っているか、またそれらは、きょうだいの性別やきょうだい間の位置、家族構成などの条件によって違いがあるのか、さらに保護者自身は、きょうだいに対するインフォーマルサポートの実際をどのように評価しているのか、きょうだいのインフォーマルサポートに対する期待感と保護者のとらえた実際のインフォーマルサポートには差があるのかについて、明らかにする。次に、同意を得られた保護ときょうだいに対して面接を実施し、インフォーマルサポートへの期待感が高い群と低い群では、実際にインフォーマルサポートにどのような違いがあるのか、併せて保護者の子育て上の悩みや保護者自身が得ているサポートにも違いがあるのかについて検討する。これにより、きょうだいの子育てに必要なインフォーマルサポートの充実のための支援について示唆を得ることを目的とする。

II 方 法

1 質問紙調査

(1) 調査対象

阿部・神名(2011)の調査に併せて、T県内の特別支援学校11校に在籍する児童生徒のうち、小学生以上のきょうだいのいる家庭(きょうだい

が複数の家庭は、いちばん年上、あるいは、障害のある子どものすぐ年下のきょうだいを対象とする)のきょうだい1名と保護者に対して実施した。質問紙の配布は、各特別支援学校に依頼し担任を通して保護者に配布してもらい、約一週間後をめどに回収した。

調査期間は2010年2月中旬から下旬であった。

(2) きょうだいに対する質問紙について

1) きょうだいの属性(家庭環境)に関すること

- ①きょうだいの性別 ②きょうだい間の位置
③年齢 ④家族構成 ⑤学年 ⑥同胞との年齢差について記入を求めた。

表1 「きょうだいの IS 期待感」質問紙項目(小学生用)

1	あなたがおこられたときなぐさめてくれるのは
2	あなたが勉強 <small>べんきょう</small> などわからないときには、教えてくれるのは
3	あなたが何か失敗 <small>しっぱい</small> したときに、はげましてくれるのは
4	あなたに何かうれしいことがあったとき、自分のことのように喜んでくれるのは
5	あなたにいやなことがあったとき、しんげんにきいてくれるのは
6	あなたが病気 <small>びょうき</small> やけがのとき、心配 <small>しんぱい</small> してくれるのは
7	あなたが一人 <small>ひとり</small> でできないことを、手伝 <small>てつだ</small> ってくれるのは
8	あなたがけんかしたり、いじめられたりしたとき、助 <small>たす</small> けてくれるのは
9	あなたの気持ち <small>きもち</small> をよくわかってくれるのは

表2 「きょうだいの IS 期待感」質問紙項目(中学生以上用)

1	あなたがおこられたときなぐさめてくれるのは
2	あなたが勉強などわからないときには、教えてくれるのは
3	あなたが何か失敗したときに、はげましてくれるのは
4	あなたに何かうれしいことがあったとき、自分のことのように喜んでくれるのは
5	あなたにいやなことがあったとき、真剣 <small>しんけん</small> にきいてくれるのは
6	あなたが病気やけがのとき、心配してくれるのは
7	あなたが一人でできないことを、手伝ってくれるのは

8	あなたが友だちとうまくいかないときに、助けてくれるのは
9	あなたの気持ちをよくわかってくれるのは

2) 「きょうだいのインフォーマルサポート(以下、IS)期待感」質問紙

きょうだいが自らの日常生活において周囲からどのくらいの援助を得られると感じているか、その期待感を測ることを目的に、森・堀野(1992)による「児童用ソーシャルサポート質問紙」を一部改変して質問紙を作成した。質問項目を表1、表2に示す。小学生用・中学生以上用の2種類を作成し、小学生用にはひらがな表記を多くし、漢字にはふりがなをふった。原本は11項目からなり、情緒的サポート(そばにいてくれる、なぐさめてくれるなど)と実際のサポート(看病してくれる、教えてくれるなど)が含まれている。本研究では、援助を得られる期待感を測るという目的にあわないと判断した項目と、抽象的で回答しにくい項目を削除し、9項目とした。また、「けんかしたりいじめられたりしたとき助けてくれる」項目については、小学生用にはそのまま使用し、中学生以上には年齢的に友達関係の幅広い問題が想定されるため、「友だちとうまくいかないときに助けてくれる」という表現に変更した。

対象となるサポート源は、①父 ②母 ③兄弟姉妹(障害の有無を問わず、その家庭内の兄弟姉妹全般とした) ④祖父 ⑤祖母 ⑥友人・知人 ⑦学校の先生とした。サポート源ごとに「きっとそうだ」「たぶんそうだ」「たぶんちがう」「ぜったいちがう」の4件法で回答を求めた。

(3) 保護者に対する質問紙について

1) 保護者の属性に関すること

①父親・母親の別 ②同胞の主障害について記入を求めた。

2) 「保護者から見たISの実際」質問紙(表3)

「きょうだいのIS期待感」を測る質問紙の項目を文言を変えて使用した。きょうだいに対して実施した質問紙は「期待感」を測るものであるが、保護者に対する質問紙は「実際きょうだ

いに対してそのようなことがあったかどうか」という、実際にきょうだい周囲からどのくらい援助を得られていたかについての保護者の認識を測るものである。きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際とを比較することにより、IS に関する親子の意識の開きを調べることをねらいとしている。対象となるサポート源はきょうだいへの質問紙と同じである。回答は「きっとあった」「たぶんあった」「たぶんなかった」「ぜったいなかった」の 4 件法である。

表 3 「きょうだいへの IS 実際」質問紙項目（保護者用）

1	きょうだいがおこられたときなぐさめてあげたことがありましたか
2	きょうだいが勉強などわからないときには、教えてあげたことがありましたか
3	きょうだいが何か失敗したときに、はげましてあげたことがありましたか
4	きょうだいに何かうれしいことがあったとき、自分のことのように喜んだことがありましたか
5	きょうだいにいやなことがあったとき、真剣にきいてあげたことがありましたか
6	きょうだいが病気やけがのとき、心配したことがありましたか
7	きょうだいが一人でできないことを、手伝ってあげたことがありましたか
8	きょうだいが友だちとうまくいかないときに、助けてあげたことがありましたか
9	きょうだいの気持ちをよくわかってあげたことがありましたか

2 面接調査

(1) 調査対象

あらかじめ、質問紙調査の際に全保護者に対し面接調査に対する可否を尋ねておき、実施してもよいとの回答を得た者のうち、きょうだいに対する質問紙調査の結果で IS 期待感得点が平均値より ± 1SD 外側にある者を高得点群・低得点群とし、面接対象者として抽出した。その中で再度面接の可否を尋ね、承諾を得た保護者ときょうだいに面接調査を行った。

面接調査は、T 大学教室で、保護者、きょうだい別々に実施した。実施にあたり、調査協力者に対しては、「面接調査参加承諾書」について説明し、プライバシーの保護を約束した。同意を得た保護者には「面接調査参加承諾書」に署名をして

もらった。面接に要する時間は一人約 1 時間程度であり、承諾を得て内容を IC レコーダーで録音した。

調査時期は、2010 年 8 月であった。

(2) 内容および項目の選定

保護者ときょうだいに対して実施した面接調査の項目は表 4 以下のとおりである。質問は、保護者については 3 項目 6 質問、きょうだいについては 2 項目 3 質問からなる。質問内容を表 5、6 に示す。質問の選定にあたっては、立山 (2003) と川上 (1997) の先行研究を参照し、本研究で明らかにしたいことを設定した。面接では、各質問ごとに自由に回答するよう求めた。

表 4 面接の項目と対応する質問番号

意味内容で構成した項目		質問番号
保護者	項目 1 気になるサイン、悩み事や困り事	質問 1 2
	項目 2 きょうだいに対する配慮	質問 3 4
	項目 3 子育ての支えとなるもの	質問 5 6
きょうだい	項目 4 困った時や悩んだ時のインフォーマルサポート	質問 1 2
	項目 5 親子の関係	質問 3

表 5 保護者に対する質問

質問	内 容
質問 1	きょうだい児を育てる上で、悩んだり困ったりしたことはありますか
質問 2	きょうだい児のどんなことが困りましたか 現在、きょうだい児の様子で気がかりなことはありますか これから、障害のあるお子さんと一緒に育つ中で心配だと思っていることはありますか
質問 3	悩み事や困り事をどうやって解決しましたか
質問 4	きょうだいを育てるにあたって、気をつけてきたこと・工夫してきたことについて教えてください
質問 5	きょうだいを育てる上で、あなた自身の支えになるものについて教えてください
質問 6	周囲（特に家族）からの支えで、うれしかったことを教えてください

表 6 きょうだいに対する質問

質問	内 容
質問 1	これまで、困ったり悩んだりした時はどんなふうに対応していましたか 例えば、だれにどんなふうにご相談したり助けてもらったりしましたか

質問 2	今、困っていたり、悩んだりしているなら、または、これから心配なことがでてきたら家族のだれに相談できそうですか
質問 3	お父さんやお母さんのことで、思っていることを聞かせてください 例えば、不満に思うことや、こんなところはよかったな、ということがあれば教えてください

Ⅲ 結 果

1 質問紙調査の結果

(1) 調査結果の集計及び分析方法

回収数538, 有効回答346, 有効回答率64%であった。きょうだいの回答については、「きっとそうだ」(4点), 「たぶんそうだ」(3点), 「たぶんちがう」(2点), 「ぜったいちがう」(1点)を配し, 保護者の回答については, 「きっとあった」(4点)「たぶんあった」(3点)「たぶんなかった」(2点)「ぜったいなかった」(1点)を配して, それぞれサポート源ごとに集計した。これらの数値は, いずれも IS の事実の多少を示すものではなく, きょうだいについてはこれまでの経験に基づく IS への期待の度合い, 保護者については同様にこれまでの経験に基づく IS の実際についての認識の度合いを示すものと言える。きょうだいの回答については, 得点が高くなるほど, 各サポート源に対する期待感が高いことを示し, 保護者については, 得点が高くなるほど, 各サポート源について保護者が実際にサポートを行ったという認識の度合いが高いことを示している。

調査結果の分析にあたっては, まず単純集計によって分析し, 必要に応じて PASW Statistics 18で統計的分析を行った。

(2) きょうだい・保護者の情報について

回答のあった346の家庭において, 回答したきょうだいの男女別割合は, 男子147名(42%), 女子199名(58%)であった。

きょうだいの年代別割合は, 小学校低学年(小低)45名(13%), 小学校高学年(小高)82名(24%), 中学校・高校(中・高)150名(43%), 大学・社会人(大・社)69名(20%)であった。

きょうだい間の位置は, 兄85名(25%), 姉133名(38%), 弟61名(18%), 妹67名(19%)であった。

きょうだいと同胞との年齢差は, 0~2歳違い129名(37%), 3~5歳違い164名(48%), 6歳~違い53名(15%)であった。

回答者の家族構成は, 核家族200名(58%), 複合家族(祖父母などと同居している)146名(42%)であった。

同胞の主障害別割合は, 知的障害270名(78%), 肢体不自由45名(13%), 聴覚障害26名(8%), 視覚障害5名(1%)であった。

質問紙調査に回答した保護者の内訳は, 父親21名(6%), 母親325名(94%)であった。

(3) 家庭環境の要因がきょうだいの IS 期待感に及ぼす影響

「きょうだいの IS 期待感」をサポート源別に比較した(表7)。「祖父」と「祖母」についてはいない家庭や片方だけいるという家庭があったので, 両者をまとめて「祖父母」として平均を算出した。「友人・知人」と「学校の先生」は家族外のサポート源として「その他」として, 平均を算出した。サポート源全体の平均は2.95であり, 各サポート源の平均は, 「父親」2.99「母親」3.34「きょうだい」2.43「祖父母」2.75「その他」3.11であった。

表7 きょうだいの IS 期待の平均(サポート源別)

	度数	平均値	標準偏差
きょうだいの IS 期待感 全平均	346	2.95	.575
きょうだい IS 期待感 父	330	2.99	.823
きょうだい IS 期待感 母	345	3.34	.633
きょうだい IS 期待感 きょうだい	305	2.43	.844
きょうだい IS 期待感 祖父母	311	2.75	.779
きょうだい IS 期待感 その他	340	3.11	.591

家庭環境(「きょうだいの男女別」「きょうだいの年代」「きょうだい間の位置」「きょうだいと同胞の年齢差」「家族構成」)の各要因において, 「きょうだいの IS 期待感」の平均に差があるかについて t 検定あるいは分散分析を用いて比較した(表8)。分析の結果, 「きょうだいの年代」にのみ, 1%水準で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法で多重比較したところ, 小学校低学年群のきょうだいの IS 期待感(平均3.24, SD 0.499)が中学・高校群のきょうだい(平均2.88, SD 0.544)より, また, 大学・社会人群のきょうだ

い (平均2.76, SD 0.634) より, 有意に高かった。また, 小学校高学年群のきょうだいの IS 期待感 (平均3.07, SD 0.536) が, 大学・社会人群のきょうだいの IS 期待感 (平均2.76, SD 0.634) よりも, 有意に高かった。その他については, 有意な差はみられなかった (表9)。

表8 家庭環境ときょうだいの IS 期待感の平均

群	n	平均	標準偏差	F 値, t 値	(df)	
男女別 きょうだいの	男子	147	2.96	.605	.327 n.s.	(344)
	女子	199	2.94	.553	等分散を仮定	
年代 きょうだいの	小低	45	3.24	.499	8.922**	(3,342)
	小高	82	3.07	.536		
	中高	150	2.88	.544		
	大・社	69	2.76	.634		
間の位置 きょうだいの	兄	85	2.89	.584	1.974 n.s.	(3,342)
	姉	133	2.89	.551		
	弟	61	3.05	.634		
年齢差 きょうだいの	0~2 歳	129	2.93	.590	.425 n.s.	(2,343)
	3~5 歳	164	2.98	.545		
	6 歳以上	53	2.89	.628		
家族構成 きょうだいの	核家族	200	3.00	.587	1.734 n.s.	(344)
	複合家族	146	2.89	.553	等分散を仮定	

** $p < .01$

表9 きょうだいの年代の違いにおける多重比較 (Tukey HSD)

年代	平均値の差	標準誤差	有意確率	95%信頼区間	
				下限	上限
期待感全平均の IS	小低-小高	.169	.103	.358	-.10 .44
	小低-中・高	.356**	.094	.001	.11 .60
	小低-大・社	.485***	.107	.000	.21 .76
	小高-中・高	.187	.076	.069	-.01 .38
	小高-大・社	.316**	.091	.003	.08 .55
	中・高-大・社	.128	.081	.386	-.08 .34

** $p < .01$, *** $p < .001$

(4) きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際の比較

「きょうだいの IS 期待感」と「保護者から見た IS の実際」の平均値と標準偏差を表10に示す。全サポート源の平均値のどれもが, きょうだいの期待感よりも保護者から見た IS の実際の方が高い結果になった。

両者の平均値に差があるかどうかについて, 全体の平均値およびサポート源ごとの平均値を t 検定で分析した (表11)。分析の結果, 全体の平均値およびサポート源ごとの平均値は, すべて保護者から見た IS の実際が有意に高かった。

また, きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際間の相関を調べたところ, Pearson の相関係数は0.442となり, 中程度の正の相関があることが示された。

表10 きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際の平均 (サポート源別)

	度数	平均値	標準偏差
きょうだいの IS 期待感 全平均	346	2.95	.575
きょうだい IS 期待感 父	330	2.99	.823
きょうだい IS 期待感 母	345	3.34	.633
きょうだい IS 期待感 きょうだい	305	2.43	.844
きょうだい IS 期待感 祖父母	311	2.75	.779
きょうだい IS 期待感 その他	340	3.11	.591
保護者から見た IS の実際 全平均	346	3.30	.423
保護者から見た IS の実際 父	332	3.51	.656
保護者から見た IS の実際 母	343	3.71	.336
保護者から見た IS の実際 きょうだい	269	2.88	.837
保護者から見た IS の実際 祖父母	307	3.14	.654
保護者から見た IS の実際 その他	330	3.29	.505

表11 きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際の平均

群	n	平均	標準偏差	t 値	(df)	
全体	きょうだい	346	2.95	.575	-12.499**	345
	保護者	346	3.30	.423		
サポート源 (父親)	きょうだい	330	2.99	.823	-11.950**	325
	保護者	332	3.51	.656		
サポート源 (母親)	きょうだい	345	3.34	.633	-8.056**	342
	保護者	343	3.71	.336		

(きょうだいサポート源)	きょうだい	305	2.43	.844	-8.236**	258
	保護者	269	2.88	.837		
(祖父母源)	きょうだい	311	2.75	.779	-4.976**	295
	保護者	307	3.14	.654		
(その他源)	きょうだい	340	3.11	.591	-12.116**	327
	保護者	330	3.29	.505		

** $p < .01$

2 面接の結果

(1) 面接対象者について

質問紙調査の結果を踏まえ、きょうだいの IS 期待感得点が平均値より +1 SD 外側にある高得点群 (以下, H 群) 8 組, -1 SD 外側にある低得点群 (以下, L 群) 2 組から承諾を得たので, 面接を実施した。きょうだいの年代については表 12 に, きょうだい間の位置については表 13 に, 家族構成については表 14 に, それぞれ示す。また, 面接対象保護者はすべて母親で, その年齢は 30代 5 名, 40代 4 名, 50代 1 名であった。また, 同胞の障害種は, 聴覚障害 1 名, 知的障害 9 名であった。

表 12 IS 期待感の H 群・L 群の年代別内訳

(単位 人)

		小低	小高	中・高	大・社
IS 期待感	H	2	4	1	1
	L	0	0	2	0

表 13 IS 期待感の H 群・L 群のきょうだい間の位置

(単位 人)

		兄	姉	弟	妹
IS 期待感	H	0	2	2	4
	L	0	0	1	1

表 14 IS 期待感の H 群・L 群の家族構成

(単位 人)

		核家族	複合家族
IS 期待感	H	6	2
	L	2	0

(2) 調査結果の集計および分析方法

項目ごとに得られた発言を逐語録にし, 筆者らと研究の主旨を理解している特別支援教育にかかわる教員他 2 名とで, KJ 法を使い, 全員の意見が一致するまで検討を重ねてカテゴリー化した。カテゴリー化は, 2 段階で行った。まず, 発言そのものを意味内容ごとに集めて短い文章で表し, それをタイトルとした。次にタイトルをさらに分類してカテゴリーとした。また, H 群・L 群において, それぞれ各タイトルに該当する発言の有無を調べてカテゴリー別に合計し, 群ごとの全発言数における各カテゴリーの占める割合を算出した。

(3) 保護者に対する調査結果

1) 項目 1 「気になるサイン, 悩み事や困り事」

きょうだいの IS 期待感 H 群におけるカテゴリーの占める割合は, 「母親の不全感」(母自身が, 相手をしてやれない, きょうだいに我慢をさせてしまう) 22%, 「否定的な感情の表出」(不公平感の訴え, 同胞に対する否定的な言葉や態度, コミュニケーションが通じず, けんかになる) 12%, 「感情や行動の抑制」(自分の意思を伝えない, 気持ちをささない, 自分の気持ちを抑えている, 同胞や親に対して, 「いいきょうだい」であらねばならないとする) 21%, 「友だちへの対応困難」(友人の同胞への反応・周囲への表明, 周囲からの視線, 同胞の事をたずねられて答えに困る, 嫌がらせ・いじめがある) 18%, 「不適応行動」(チックや腹痛, 頭痛など身体症状がでた) 6%, 「将来に関する不安」(思春期への不安, 結婚の心配) 21% で, 計 16 タイトルであった (図 1)。

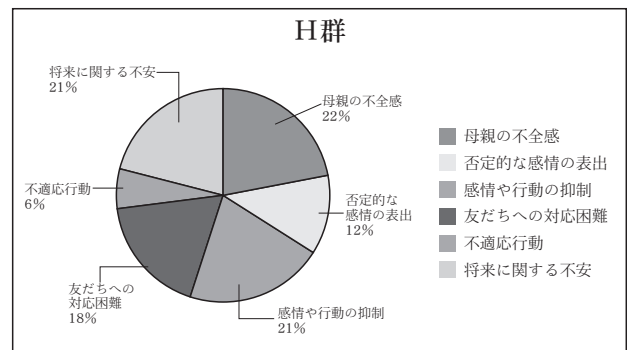


図 1 きょうだいの IS 期待感 (H 群) における項目 1 「気になるサイン, 悩み事や困り事」内訳 (単位 %)

きょうだいの IS 期待感 L 群におけるカテゴリーの占める割合は、「母親の不全感」0%、「否定的な感情の表出」（同胞に対する否定的な言葉や態度）7%、「感情や行動の抑制」（同胞や親に対して、「いいきょうだい」であらねばならないとする）22%、「友だちへの対応困難」（嫌がらせ・いじめがある）50%、「不適応行動」（チックや腹痛、頭痛など身体症状がでた、不登校）14%、「将来に関する不安」7%で、タイトル数は6であった（図2）。

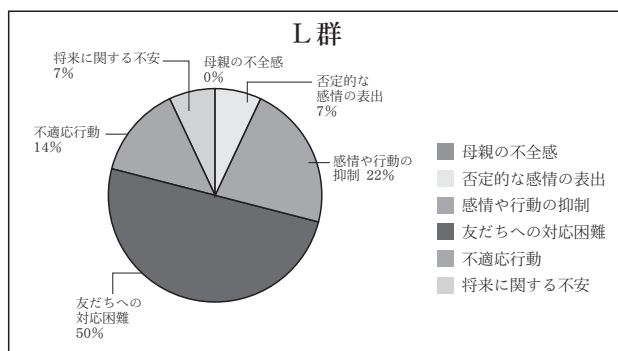


図2 きょうだいの IS 期待感 (L 群) における項目 1「気になるサイン、悩み事や困り事」内訳 (単位 %)

2) 項目 2 「きょうだいに対する配慮」

きょうだいの IS 期待感 H 群におけるカテゴリーの占める割合は、「きょうだいを優先するかかわり」（きょうだいと過ごす時間を増やす、スキンシップ、きょうだいを優先する、きょうだいを中心になれるものをみつける）35%、「同等に扱う」（公平な態度をとる）5%、「抑圧的な介入をしない」（きょうだいに我慢させない）9%、「同胞に対するユーモアのある対応」（同胞のふるまいをユーモアで処理、きょうだいが負担を感じないように明るくふるまう）13%、「障害やその対応方法の説明」（同胞に対する理解を促す）20%、「きょうだいを支える協力体制」（夫婦間の共通理解のもとできょうだいに対応する、家族以外の人にきょうだいのことを相談して対応方法を考える）15%、「きょうだいに対する母親以外の家族の支え」（母以外に甘えられる場所を作る）5%で、タイトル数は11であった（図3）。

きょうだいの IS 期待感 L 群におけるカテゴリーの占める割合は、「きょうだいを優先するかかわり」（きょうだいを中心になれるものを

みつける）100%のみで、タイトル数は1であった（図4）。

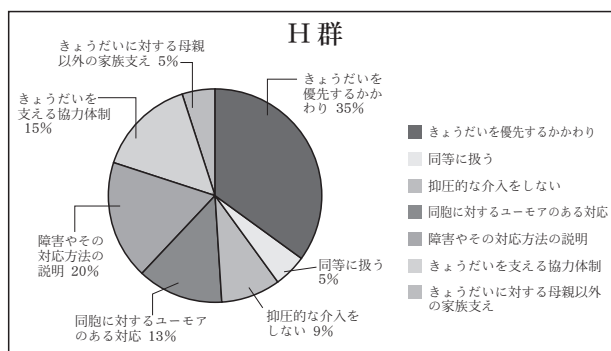


図3 きょうだいの IS 期待感 (H 群) における項目 2「きょうだいに対する配慮」内訳 (単位 %)

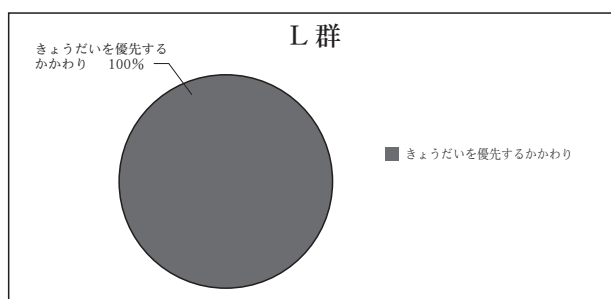


図4 きょうだいの IS 期待感 (L 群) における項目 2「きょうだいに対する配慮」内訳 (単位 %)

3) 項目 3 「子育ての支えとなるもの」

きょうだいの IS 期待感 H 群におけるカテゴリーの占める割合は、「友だち・仲間」15%、「夫」33%、「きょうだい児自身」33%、「祖父母」19%、「親戚」0%、「趣味」0%、「支えになる言葉」0%で、タイトル数は4であった（図5）。

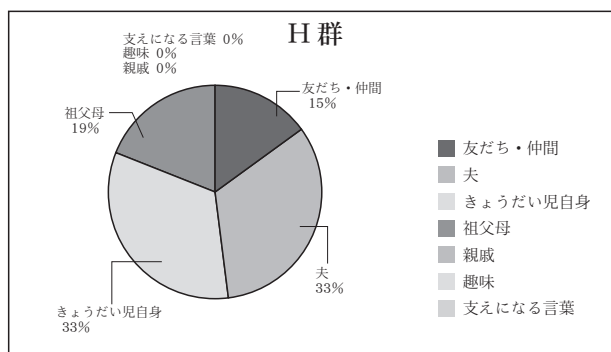


図5 きょうだいの IS 期待感 (H 群) における項目 3「子育ての支えとなるもの」内訳 (単位 %)

きょうだいの IS 期待感 L 群におけるカテゴリーの占める割合は、「友だち・仲間」50%、

「祖父母」20%、「親戚」10%、「趣味」10%、「支えになる言葉」(障害のある子どもが生まれたことに対する積極的な意味づけ)10%で、タイトル数は5であった(図6)。

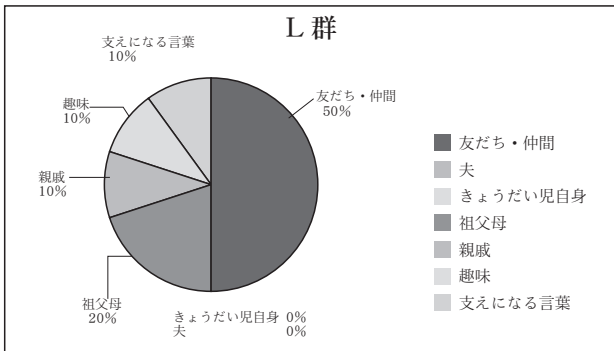


図6 きょうだいのIS期待感(L群)における項目3「子育ての支えとなるもの」内訳 (単位 %)

(4) きょうだいに対する調査結果

1) 項目4「困った時や悩んだ時のIS」

きょうだいに對し、困った時や悩んだ時の解決方法と相談相手について尋ねたところ、ISを活用している回答として「母親に相談する」、「母親以外に相談する」の2カテゴリー、ISを活用していない回答として、「自分で解決する」、「聞き流す」の2カテゴリー、またその他として「困ったことがない」のカテゴリーが得られた。IS期待感H群におけるカテゴリーの占める割合は、「母親に相談する」60%、「母親以外に相談する」(父、祖母、友達)24%、「自分で解決」4%、「聞き流す」(普通にリラックスするようにする、気にしないで聞き流す、嫌なことは忘れようとする)12%、また「困ったことがない」は0%であった。タイトル数は8であった(図7)。

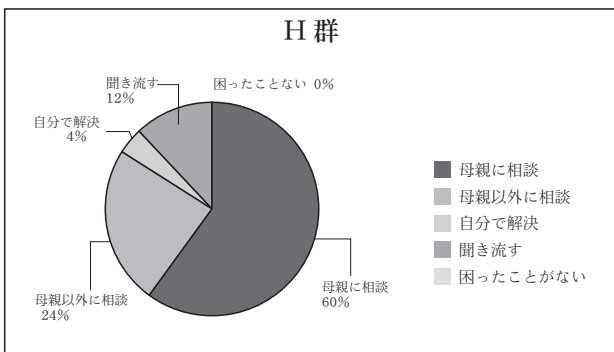


図7 きょうだいのIS期待感(H群)における項目4「困った時や悩んだ時のIS」内訳 (単位 %)

きょうだいのIS期待感L群におけるカテゴリーの占める割合は、「母親に相談する」63%、「母親以外に相談する」(兄に相談)12%、「自分で解決」0%、「聞き流す」(気にしないで聞き流す)12%、「困ったことがない」は13%であった。タイトル数は4であった(図8)。

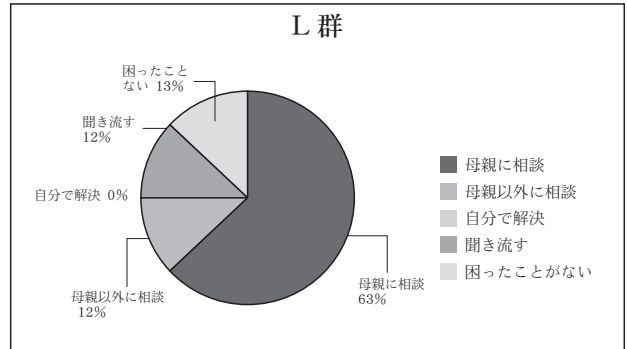


図8 きょうだいのIS期待感(L群)における項目4「困った時や悩んだ時のIS」内訳 (単位 %)

2) 項目5「親子の関係」

きょうだいのIS期待感H群におけるカテゴリーの占める割合は、「ISの充実」41%、「両親のすてきなところ」24%、「要求の受けとめ・特別な扱い」16%、「自分へのかかわり方への不満」4%、「同胞とのことでの不満」2%、「不満なし」12%で、タイトル数は29であった(図9)。きょうだいのIS期待感L群におけるカテゴリーの占める割合は、「ISの充実」50%、「両親のすてきなところ」12%、「要求の受けとめ・特別な扱い」0%、「自分へのかかわり方への不満」25%、「同胞とのことでの不満」0%、「不満なし」13%で、タイトル数は8であった(図10)。カテゴリーごとのタイトルを母親と父親に対するものを分けて表15に示す。

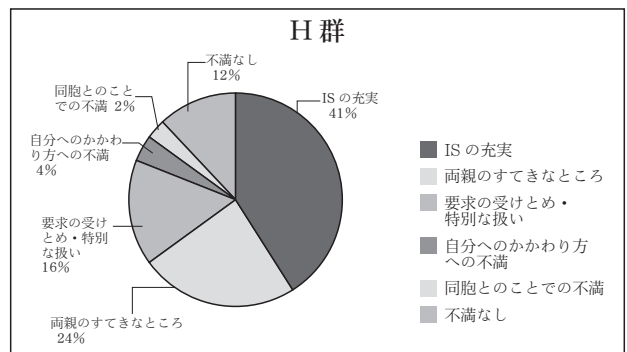


図9 きょうだいのIS期待感(H群)における項目5「親子の関係」内訳 (単位 %)

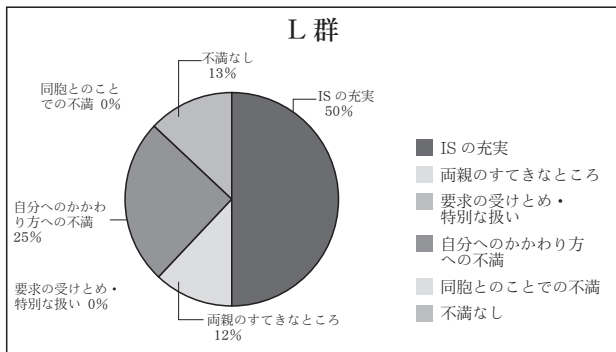


図10 きょうだいのIS期待感(L群)における項目5「親子の関係」内訳

(単位 %)

自分へのかかわり方への不満		
	H群	L群
母	心配性である	
父	ゲームしかしてくれない	何でも茶化す もっと真剣に考 えてほしいとき がある
同胞とのことでの不満		
	H群	L群
父	同胞のことをまだよくわかってい ない	

IV 考 察

表15 「親子の関係」の各カテゴリーに含まれるタイトル

両親からのISの充実		
	H群	L群
母	「ありがとう」って言ってくれる 守ってくれている, 頼りになる できる限りのことをしてくれている 私たちを大切にしてくれている 習い事でやる気ができるように応援 してくれる 「大丈夫」って言ってくれる 困ったことあったら, 相談にのっ てくれる 自分たちきょうだいに同じように 接してくれる(公平に) 夜, 一緒に寝てくれる	守ってくれてい る, 頼りになる できる限りのこ とをしてくれて いる 話をよくする, よく聞いてくれ る
父	すぐ勉強を教えてくれる スポーツも教えてくれる 話をよく聞いてくれる 子どもの心をわかってくれる 自分が風邪をひいたら仕事を休ん でくれる 自分たちきょうだいに同じように 接してくれる(公平に)	話をよく聞いて くれる
両親のすてきなところ		
	H群	L群
母	元気, 明るい こわいけど優しい お父さんといひコンビ 料理が上手	いい知恵をたく さんもっている
父	仕事を頑張っている 優しい 母といひコンビ かっこいい	
要求の受けとめ・特別な扱い		
	H群	L群
母	行きたいところに連れて行ってく れる 一緒に買い物にいつてくれる	
父	お願い事を聞いてくれる	

1 質問紙調査から

(1) きょうだいのIS期待感について

きょうだいのIS期待感のうち, サポート源として「母親」の値が1番で, 次いで「その他(友人・先生)」3番目が「父親」であった。きょうだいにとっては家族の中でも「母親」からのISが一番ほしいものであることが分かった。「父親」からのISよりも「その他(友人・知人・先生)」からのISが大きい原因の1つとしては, きょうだいの成長に従い, 友人や信頼できる家族以外の大人とのつながりができてくることが背景となっているかもしれないが, 今後, 年齢によるIS期待感の変化や父ときょうだいとの関係性を明らかにして検討する必要があるだろう。また, 祖父母については, IS期待感の値が両親に比べ低くなっている。筆者らは臨床的な経験から, 両親が同胞の世話を手を取られる日常の中で, きょうだい祖父母からのサポートを受けることが多いと考え, きょうだい自身もそれを期待しているのではないかと予想していたが, きょうだいにとっては祖父母からのサポートをそれほど重要なものとしては実感していないことが明らかになった。川上(1997)は, 「祖父母のもたらすものが母親のもたらすものの代わりにはなりえなかった」と指摘しているが, 今回の結果でもきょうだいの同様の認識が見られる。

家庭環境の要因における比較では, きょうだいの年代においてのみ有意差がみられ, 性別やきょうだいの位置, 年齢差, 核家族・複合家族などの要因は, IS期待感に影響していないことが分かった。年代別にみると, 小学校低学年群が, 中学・

高校群および大学・社会人群よりも、小学校高学年群が大学・社会人群よりもそれぞれに有意にIS期待感の平均が高かったことから、年齢の低いときほどIS期待感が高い傾向にあるといえる。このことは、きょうだい達が年齢が進むについて、障害のある同胞を抱える家族の実情を客観的に判断し、ISを期待せず精神的にも自立していこうとする状況を示しているように思われる。

(2) きょうだいのIS期待感と保護者から見たISの実際の関係について

きょうだいのIS期待感と保護者から見たISの実際については、中程度の正の相関があることが明らかになり、保護者が実際にサポートを行ったと認識している度合いと、きょうだいのIS期待感とが関係していることが分かった。すなわち、保護者が積極的にサポートをしていることがきょうだいのIS期待感に反映されるのは確かであるといえる。

しかしながら、きょうだいのIS期待感と保護者から見たISの実際の平均値を比較すると保護者の値がきょうだいよりもすべてのサポート源において有意に高く、親子間の認識の開きが生じている。このことから、保護者から見て、両親や家族、周りの人々などがきょうだいに対してサポートしてきたと思っているレベルほどには、きょうだいの方はそのサポートを期待していないということが分かった。これは、サポートの事実の有無の問題ではなく、サポートの実践者側とそれを受けとめる側の認識の度合いの差であり、サポートの質的な問題と捉えることができるのではないだろうか。すなわち、保護者は「このサポートは子どもにとっていいことだろう」と思って支援をするが、きょうだいに側にすれば、自分が本当に欲しているサポートと受けとっていない場合があるということである。保護者の「思い入れ」ときょうだいの「思い」との間で開きが生じているといえる。例えば、祖父母からのサポートは、きょうだいよりもむしろ保護者の方が「サポートしてもらっている」と感じているのではないだろうか。同胞に手がかり、かかわりたくてもきょうだいにかかわってやれないとき、祖父母の援助があることで切り抜けられるという話はよく聞く。この場合、実際に「助かった」という思いを抱くのは

保護者の方であり、きょうだいと同じようにサポートしてもらえると感じているとは限らないであろう。

2 面接調査から

(1) 項目1 保護者から見たきょうだいの「気になるサイン・悩み事や困り事」(図1, 2)

H群がL群より多い割合を占めるカテゴリーは、「母親の不全感」(H群:22%, L群:0%)であった。このことは、日頃のかかわりの中でH群の保護者が「もっときょうだいに対してかかわってやりたい。けれど十分にできていない。」と感じていることを表していると思われる。H群のきょうだいは自分に保護者のそのような気遣いが向けられていると感じ取るので、むしろIS期待感が高くなっているのかもしれない。また、同様にH群がL群より大きい割合を占める「将来に関する不安」(H群:21%, L群:7%)については、面接調査の際に、H群ではきょうだいの問題について先輩保護者から聞いたり、書物を読んだりしてたくさんの情報を収集している保護者が多く見受けられた。きょうだいの成長過程に生じるであろう問題に早くから配慮したいと考えて、手を尽くしている様子がうかがわれる。

一方、L群に見られる特徴として、L群では「友だちへの対応困難」の占める割合が50%、「不適応行動」の占める割合が14%であるのに対し、H群では前者が18%、後者が6%であった。これら2つはきょうだい自身の抱える問題としてL群の保護者にとって大きな負担になっていることがうかがわれる。これらの問題は随時起きているので、保護者は常に対応せざるを得ない。そのため、L群にはきょうだいに十分かかわっていないとする「母親の不全感」を挙げる母親がいないのであろう。しかし、これらの問題へ取り組む母親のサポートが必ずしもきょうだい本人には期待されるサポートとなり得ていない現状であると考えられる。

(2) 項目2「きょうだいに対する配慮」(図3, 4)

H群では、カテゴリーが7で、11タイトルに及ぶ発言があった。きょうだいに対する配慮の種類が多く、きょうだいを優先するかかわりや同等に扱うなど多様なバリエーションがある。一方、

L群の占めるカテゴリーは1(タイトル1)で、「きょうだいを優先するかかわり」のみであった。L群の調査協力者の数が少ないので断言することは難しいが、きょうだいのIS期待感が高いのは、保護者はきょうだいに対して多様な配慮を行っていることと関連するといえるのはなかろうか。

また、H群では「きょうだいを支える協力体制」として夫婦間の共通理解のもとできょうだいに対応すること、家族以外の人に相談して対応方法を考えるが挙げられていたが、いずれもL群にはなかった。また、「母親以外のきょうだいに対する家族の支え」として、H群では、家庭の中での母以外に甘えられる場所を作ることが挙げられていた。このことは、母親一人が悩み事・困り事を抱えるのではなく、一番身近な夫をはじめ、家族との共通認識のもとできょうだいを育てていくことが、最終的にきょうだいのISにつながることを示しているといえる。

(3) 項目3「子育ての支えとなるもの」(図5, 6)

全7カテゴリーのうち、H群の占めるカテゴリー4(タイトル4)、L群の占めるカテゴリー5(タイトル5)であり、カテゴリー数では大きな差がないが、内訳においては違いがみられた。

まず、H群における「きょうだい自身」が33%であるのに対し、L群では0%であった。H群の保護者の具体的な発言には、「同胞のことで悩むことが多いので、きょうだい自身がいってくれることが支え」「子どもが成長すること、それだけでうれしい」「きょうだいがいてくれるから、(我が家が)家族でいられる」「本人の健やかな成長があることそのもの」「(母親自身が)安心感をもらっているから」などがあつた。保護者がきょうだいに対してその存在そのものを支えとしていることから、きょうだいは「愛されている、大切にされている」という実感することができ、H群のきょうだいのIS期待感を高めていることにつながっていると思われる。L群との比較でこの点が異なっていることは、根本的な親子の関係を考える上で大変興味深いものと思われる。

また、H群における「夫」が33%であるのに対し、L群では0%である。項目2「きょうだいに対する配慮」のところでも述べたが、母親自身が父親である夫に支えられて、子育てに共にかか

わることが、やはりきょうだいの「大切にされている」実感につながり、きょうだいのIS期待感を高めることにつながると考えることができる。しかし、上記の点については、きょうだいの発言からも分析をする必要がある。

「祖父母」からの支えが、H群、L群ともにほぼ同じ割合であることから、祖父母の存在は保護者にとって、具体的で生活に密着した支えであると考えられる。それに対して「きょうだい児自身」は精神的な支えと位置づけてよいと考える。「夫」は両者の中間に位置していると考えられる。

一方、L群では「友だち・仲間」の占める割合は50%であり、H群では15%となっている。また少数だが、L群における「趣味」「支えになる言葉」がそれぞれ10%、H群はそれぞれ0%となっている。「支えになる言葉」とは、障害のある子どもを授かったことを自分が肯定的に捉えることで自分を支える内容である。L群の保護者が「家族内」よりも「家族外」あるいは「趣味」など個人的な家族と関係しないものを支えにしていることが明らかになった。相談できる相手が多いことや、自分の時間を捻出して趣味に没頭する時間を作っていることは保護者の精神衛生上好ましいことと考えられるが、反面、L群では、母親自身が、きょうだいをはじめとした家族を支えとしていない傾向が顕著であり、サポートし合う関係の薄さがあるのではないかと考えられる。

(4) 項目4「困った時や悩んだ時のIS」(図7, 8)

H群・L群ともに「母親に相談」の占める割合がそれぞれ60%、63%であり、きょうだいが一番母親を頼りにしていることが明らかになった。しかし、H群における「母親以外に相談」の占める割合は24%であるのに対して、L群では12%にとどまっている。H群のきょうだいには相談できる相手として、父親、祖母、友達と頼りにしている対象が複数存在し、きょうだいのIS期待感を高めていることにつながっていると思われる。具体的な発言の中には『「(お母さんに言えないことがあったら) いとこでもいいし、おばあちゃんでもいいし、誰にでも相談してね』と言われている」と、きょうだいに対して頼りにしていい相手を告げて、きょうだいには味方がたくさんいる

ことを常々話しているという家庭もあった。そのような話ができる時間を保護者が確保し、向き合って話をしていることもきょうだいの IS 期待感を高める一因になっていると思われる。

一方 L 群では、母親以外の相談相手に父親が含まれていなかった。このことは、先に挙げた母親の質問項目である項目 3「子育ての支えとなるもの」で見られた結果と同様であり、父親からのサポートの弱さをきょうだいも感じているようである。

(5) 項目 5 「親子の関係」(図 9, 10)

「IS の充実」「両親のすてきなところ」の占める割合は、H 群でそれぞれ 41%、24%、L 群でそれぞれ 50%、12% であり、両群とも保護者からのサポートを意識していることが見て取れる。H 群では、表 15 に見るように発言のタイトルも多様であり、きょうだいの発言の内 94% は保護者のかかわりに対する肯定的評価で占められた。具体的な発言として「お母さんに『ありがとう』って言われるとすごくうれしい、また、助けたいと思う」、「お母さんのいいところは、いつも味方になってくれるところ」、「やってみるように応援してくれている」「困ったことがあるといつも相談にのってくれる」などが挙げられている。

一方、父親・母親別にみると、L 群では、父親のすてきなところに関する発言は見られず、ここでも父親の存在の薄さが示唆された。

また、H 群における「要求の受け止め・特別な扱い」の占める割合は 16% であるのに対して、L 群では 0% であった。一方、H 群における「自分へのかかわり方への不満」の占める割合は 4% であるのに対し、L 群では 25% にものぼり、この 2 つのカテゴリーにおいては両群に大きな違いがみられる。H 群のきょうだいは、「行きたい所へ連れて行ってくれる」「一緒に買い物に行ってくれる」など、保護者によって自分の要求を満たされ、特別な扱いをされていることを実感することで、IS 期待感を高めているのではないかと思われる。一方、L 群のきょうだいには保護者に支えられてはいるが、要求を受け止めてもらったと実感できる体験が少ないと想定される。「ゲームしかしてくれない」、「何でも茶化す」、「真剣に考えてほしいときがある」など、きょうだいは、

保護者に受けとめてもらえない部分を不満として表現していることが分かる。保護者への質問項目 2「きょうだいに対する配慮」では、L 群の保護者の配慮は「きょうだいを優先するかかわり」のみを挙げていたが、保護者は、きょうだいに対して配慮をしていると思い込んでいても、受け取る側のきょうだいにとっては、配慮の少なさやバリエーションの幅の狭さから十分に満足できるものではないということであろう。保護者の配慮している「つもり」と、きょうだいの受けとめとのギャップが、先の質問紙調査で明らかになったように保護者から見た IS の実際ときょうだいの IS 期待感の差という形で表れているといえる。また、L 群の保護者はそのことに気付いていない可能性も考えられる。

また、少数であるが、「同胞とのことでの不満」では、H 群が 2%、L 群が 0% であり、H 群のきょうだいが父親に対して不満を抱いているケースであった。具体的な発言に「お父さんは同胞への接し方が全然分かっていない」、「お父さんが同胞の行事などへ参加しない」とあり、自分だけでなく同胞も含めて家族のサポートの在り方を意識している様子が見られる。

V まとめ

本研究では、質問紙調査、面接調査より、きょうだいの IS 期待感について、その実態を明らかにすることができた。得られた知見に基づき、きょうだいの子育て支援について考察する。

まず 1 点目として、きょうだいの IS 期待感に影響を及ぼす要因として年齢があり、年齢が進むにつれ IS 期待感が減少する傾向にあることが分かった。これは、きょうだいが成長とともに IS を必要としなくなったのか、あるいは、同胞の子育てに尽力する保護者の現状を理解し期待できないと判断するようになったのかなど、その原因を明らかにするまでには至らなかった。しかし、きょうだいが周囲に IS を期待している年少期にこそ、それに応えるための子育ての配慮が必要であり、親子関係の構築に向け、幼児期からの家族支援が求められる。

2 点目であるが、きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際の両者には中程度の相関があり、保護者が実際にサポートを行ったと認識してい

る度合いと、きょうだいの IS 期待感とが関係していることが分かった。しかしながら、きょうだいの IS 期待感と保護者から見た IS の実際の平均値を比較すると保護者の値がきょうだいよりも有意に高く、保護者が行ったと考える IS について、きょうだいは保護者が認識しているレベルほどには受け取っていると感じていないことが分かった。このことは、保護者が行っているつもりの支援と実際にきょうだいが受け取れると期待している支援にギャップがあることを示しており、親子間での感情の行き違いが生じ、それが子育て上の問題につながっていることが予測される。面接調査から、そのギャップの内容について考察すると、きょうだいの IS 期待感 H 群の保護者はきょうだいに対し多種多様な配慮でかわり、その要求を満たすかわりをしてののに対し、きょうだいの IS 期待感 L 群の保護者の特徴は、きょうだいに対する配慮の種類が少なく、きょうだいを優先するかかわりのみであり、きょうだいは要求を受け止められたと感じられず、不公平感や不満をもっていることが分かった。このように、H 群と L 群では、きょうだいに対するサポートに質的な差があり、特に L 群では、それを改善するための支援が必要であると言える。

3 点目に、サポート源の問題がある。H 群のきょうだいには、母親以外のサポート源として父親や祖母、友達が存在があり、きょうだいの周囲にサポート源となる人が多いことが分かった。一方、L 群では、きょうだいが困ったときの相談相手が少なく、特にきょうだい自身からも、母親からもサポート源としての父親の存在が十分語られなかった。きょうだいは、父親に対し、「もっと向き合ってほしい」という思いを持っている発言が見られ、きょうだいの子育てにおいても父親の子育て参加を促進し、IS を高めるための支援が必要であるといえる。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、T 県内特別支援学校の校長先生はじめ教職員の皆さま、保護者の皆さまに多大なご配慮とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

文 献

- 阿部美穂子・神名昌子(2011) 障害のある子どものきょうだいを育てる保護者の悩み事・困り事に関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要第 6 巻第 1 号, 1-9.
- 川上晶子(1997) 障害児のきょうだいの抱える問題に関する研究. 広島大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文.
- 三木陽子(1998) 障害児をもつ母親の「ふっきれ感」: ソーシャルサポートによる考察. 性格心理学研究. 第 6 巻 第 2 号, 150-151.
- 森和代・堀野緑(1992) 児童のソーシャルサポートに関する一研究. 教育心理学研究 40(4), 402-410.
- 西村辨作・原 幸一(1996) 障害児のきょうだい達(1). 発達障害研究第 18 巻 第 1 号, 56-67.
- 西村辨作・原 幸一(1996) 障害児のきょうだい達(2). 発達障害研究第 18 巻 第 2 号, 150-157.
- 立山清美・立山順一・宮前珠子(2003) 障害児のきょうだいの成長過程に見られる気になる兆候-その原因と母親の「きょうだい」への配慮. 広島大学保健学ジャーナル Vol.3 (1), 37-45.
- 富安俊子・松尾寿子(2001) 障害児とそのきょうだいを育てている母親の体験調査. 母性衛生 42 (1), 87-92.
- 吉川かおり(2001) 障害児の「きょうだい」が持つ当事者性-セルフヘルプ・グループの意義-. 東洋大学社会学部紀要 39 (3), 105-118.

附 記

本研究は、平成 22 年度富山県高等教育振興財団助成事業採択、及び平成 22 年度富山大学人間発達科学部学部長裁量経費採択「障害のある子どものきょうだい児と、その親のためのいきいき子育て・親育ち応援事業」(研究代表: 阿部美穂子)の一部として行われた。

(2011年10月20日受付)

(2011年12月14日受理)